プロティノスのエネアデス

「幸福について」I-4(46)

適宜、自分なりの注を加えるもので、オレンジ色で示すことにする

この作品はプロティノスの生涯(205−279)の終わり近く(267−268に書かれたものである、つまりすでに齢(プロティノス入門、死に至らしめた病)に冒されている時である

ディオゲネス・ラエルティオス(3世紀前半)「哲学者列伝」

1
もしわれわれがよく生きることを幸福であることと同じことみなすなら、はたしてほかの生きものにもそれらにあずかることを認めねばならないようなことになるのだろうか

このように質問するのも、もし誰かが生きたものが、その本性にしたがって何の妨げも受けずに生きていくことができるなら、それらの生きものもよき生をおなっていると言っても、何の差し支えがあろう、そんなことはないからである

つまり、ただ人がよき生(エウゾーイアーεὐζωία)をいう経験をすることが(エウパテイアεὐπαθεια)とみなすなら、自分に固有なことをなしうることこそみなすなら、いずれにしても、ほかの生きものもまさしくよき生をおこっていることになるわけである

すなわち、よい経験をするとか、自分の本性に従ったことをするなどということは、ほかの生きものにも可能なことで、ただとえば音楽の心得のある生きものたちは、ほかのことでも楽しさを味わっているけれども、どりわけ自分の本性にしたがって楽しく暮っている時がそうなのであり、この点において、その生きものたちはまた自分に望ましい生活をおこっていることにもなるのである

そこで次に、「幸福は一種の目的のようなもので、自然の本性に根ざす欲求の終期の目標となっているものである(アルニム「ストア断片集」SVF III 17)」というように定めてみても、それらの生きものがその終期の目標に到達すれば、それはじぶんにも幸福にあずかることを認めることになるだろう

生きものたちがそこに到達した時、彼らの内なる自然は彼らの生のすべてを通過し、これを始めから終わりまでまあまあ不足なく、静止するのであるが…

しかし、幸福をほかの生きものに適用していくのを嫌う人がいるなら

——つまり、そのようにすると、たいへん楽しい生きものにも幸福にあずかることを認めることになる。植物も生命活動を営んでいて、最終の目的へと進展していく。見生をもっているのだから、それらの植物にも幸福にあずかることを認めることになるからだが——

だが植物には感覚がそなわっていないのだから、はかのすべての生きものに与えるものを植物に与えなければならないことはないのもしれない。しかし、植物も生きているのだから、おそらく植物によき生を認める人もいるだろう

まず、その人が付かのの生きものなどはまったくとるにたらないものと思われるという理由で、ほかの生きものにとってよき生をなすことはないとを強すべきであり、それらがどうであるかということは、それはどうして不合理なことであると思われないことがあろう

さて、このようにして、もし生の目的が快楽で(「ディオゲネス・ラエルティオス」III88アリストティポス)、そのなかによき生があるのなら、ほかの生きものにとよき生を否定する人は理にかなわないことをしていることになる。また、とえばよき生はムの平静であるとみなすことにも、同じことがある。それに対し、たとえば自分にしたがって生きることがよく生きることであるとまた生活しようとしても、やはり同じことである

つまり、その人たちが感覚するようなことをパトス(経験内容)に気付くという意味で言っているのであれば(「ピレボス」33d8)、その経験内容は、人がそれに気付く前に、すでにそれ自体ではいるのでなければならないのであって、

つまり、生にはよき生もあり、悪しきさもあるわけで、たとえば植物のばあいでも、よき生を享受したり、反対にたりすることがありうる、実を結ぶこともありうるのである

ところで、感覚作用をもっていないことを理由にして、植物によき生を認めないひとたち(アリストテレス「ニコマス倫理学」X1178b22)は、同時にまたおそらく、生きとし生けるものすべてによき生を認めないことになってしまうだろう

たとえば自然の状態にあることは、たとえそれに気付いていなくても、それ自体でよいことだし、自分に固有であることも、たとえ人が、まだ、それは自分に固有なことだとか快適なことだというふうに認知していなくても——というのは、自分に固有なものは快適なものでなければならないからだが——それ自体でよいことなのである

だからこのばあい、その経験内容がよいものであるかぎりにおいては、その経験内容をもっているものは、すでによき生きていることになる

だからこのばあい、その経験内容がよいものであるかぎりにおいては、その経験内容をもっているものは、すでによき生をおこっていることになるだろう

だとすると、なぜ感覚作用を加えるつ必要があるのだろうか、そのよいといっていることを実際に生じている経験内容ではなく、認識作用や感覚作用に与えるのならいざしらず、そうでなければ、そのような必要はないだろう

しかし、このように論駁されると、彼らは、感覚作用そのもの、つまり感覚的な生の働きが<よいのだと答えるだろう、だが、もしそうなら、どんな経験内容でも感覚でもって把握しさえすれば、それでよき生をおこっていることになるだろう

だが、これに対して、もし彼らが、そのようにまた、たとえばこれの経験内容に対する感覚作用といろいろに二つの要素からなっているとするのなら、それらの一つ一つは<よい>、わるいに関係のないものだのに、どうしてその二つからなっているものが<よい>というのだろうか

他方、もし<よさ>は経験内容の方にあるのであって、よき生とは次のような状態、すなわち、人が自分にはいまそのよい経験内容が生じていることを認知している状態をいうと主張するのなら、われわれは彼らに、次のように質問しなければならない

「それでは、その現に生じている経験内容について、人が自分には いまそれが生じていると認知すれば、それで彼はよき生をいうことになるのかね、それとも、いま自分に生じている経験内容が快適なものだという ことばかりでなく、それがよいものだということも認知する必要があるのかね」と

けれども、このばあい、それがよいものだと認知する必要があるのなら、それはもはや感覚作用の仕事ではなく、感覚作用の側にある力とは別の、もっと大きなカのすることだろう

だから、つまりよき生は、快楽を感じている者にではなく、快楽はよいものだということを認知できる者に属することになるだろう

それに<判定するものは経験の範囲内にあるものはすべているのであり、なぜなら、それは理性もしくは知性だからである

これに対して、快楽は経験である。しかし、アロゴン(非理性)が理性よりすぐれていることは決してない

とすると、どうしてその理性が自分自身を棄ておいて、自分とは反対の部類のなかにある他のものを自分よりすぐれたものとみなすことがあろうか

もちろん、そういうことはないだろう、なぜなら、植物にはよき生を認めない人びとや特定の感覚作用にこれを認める人びとは、よき生を大いなるものと考えて探し求め、それをよりよきものとしていっそう明瞭なものなかにあるとみなしながら、自分自身では気付いていないことに思われるからである

なお、よき生は理性的な生のなかにあるのであって、たんなる生のなかにあるのでもなければ、またその生が感性的なものであっても、そのなかにあるのでもないといえるだけの説(SVF III687)は、おそらく正しいだろう、だが、彼らに、なぜそうなのか、なぜ幸福を理性的な生きものだけに限るのか、その理由を尋ねるのが道理というものだろう

すなわち

「すると君たちは、理性の力が方面に基んでいて、<自然が第一位のものとして求めるもの(τὰ πρῶτα κατὰ φύσιν)>を容易に探しだし、手にいれることができるというが理由で、「理性的な」ということは加えるのかね

それとも理性がそれを探しだすことも手にいれることもできなくても、やはり理性的なということはをつけ加えるのかね

けれども、もし理性の方がそれを見つけだすだけにまさっているという理由で、理性的なということは加えるのなら、理性をもっていない生きものでも、理性なしに生来の力で、その<自然が第一位のものとして求めるもの>を手にいれることができるから、幸福な生をおこっていることになるだろう

そして、理性はたんなる助力者にすぎなくなり、それ自身のゆえに望ましいのでも、その理性の完成——それが望ましいものでもなくなってしまうだろう

これに対して、もし君たちが、理性は<自然が第一位のものとして求めるもの>を探しだした力手にいれたりするから尊ばれるのではなく、それ自身のゆえに敬avされるのだと主張するのなら、理性はほかにどんな働きをもっているのか、それの本性は何か、それを完全なものとするのは何かを説明しなければなるまいと

このように質問するのは、理性を完全なものとするのは<自然が第一位のものとして求めるもの>についての考察ではなく、理性は何か別のものに依存して完全なものとなり、別の本性をもっているのであって<自然が第一位のものとして求めるもの>を目的として、もし、その<自然が第一位のものとして求めるもの>の原因となっているもののひとつでもなく

これに対して、もし君たちが、理性は<自然が第一位のものとして求めるもの>を探しだした力手にいれたりするから尊ばれるのではなく、それ自身のゆえに敬avされるのだと主張するのなら、理性はほかにどんな働きをもっているのか、その理性の完成——それが望ましいものでもなくなってしまうだろう

要するに、その原因にはいるのではなくて、そのどれよりもすぐれているのでなければならないからである

こう言わなければ、思うに、理性がどうして尊ばれるのか、彼らは説明できないのだろう

しかし、それはそれとして、この者たちの方は、いまも立ち止まっているものよりましなものを見つけだすまで、ここにほっておこう、なぜなら彼らときたら、よく生きることの可能な者たちにとっては、どのようにすればよく生きることになるのか、説明に行き詰まってしまい、ここにとどまることを望んでいるのだから

しかし、それはそれとして、この者たちの方は、いまも立ち止まっているものよりましなものを見つけだすまで、ここにほっておこう、なぜなら彼らときたら、よく生きることの可能な者たちにとっては、どのようにすればよく生きることになるのか、説明に行き詰まってしまい、ここにとどまることを望んでいるのだから

3
だが、われわれの方は、どこかく幸福を何である と理解しているのか、最初から出なおして論じていくことによう

さて、われわれが、幸福は生のなかにあるとみなすばあい、もしその「生」ということを同義語として(広い意味で)用いたのであれば、

一方では、すべての生きものには幸福を手にいれることができるということを認めることになり、

他方では、すべての生きものがもとをと手にいれることができるもので、同一であるような成るものがあって、それが現に成る生きものにそなわっていれば、その生きものは実際によく生きているということを認めることになっただろうし、

他理性的な生きものはよく生きることができるけれども、理性をもたない生きものはもはやそうではないという説を認めるわけにはいかなかっただろう

というのも、生はどちらの生きものにも共通しているものであるし、幸福が任意の生のなかにある以上、その共通しているものは、幸福になるということに関しては同じ条件を受け入れることができるはずだからである

この点から考えると、幸福は理性的な生のなかにあると主張するようだとは、幸福がどの生きものにも共通した生のなかにあるとはみなさないのだから、自分では気が付いていないようだが、おそらく幸福を生とみなして考察を進めているのでもないことになるだろう

ストア派によれば、万物は<作るもの>としてのロゴスと<作られるもの>としての素材から成る。素材は不生不滅で、万物の基(ἀρχή)であり、それらを存在せしめるものであるゆえに、トピカ(τὸ ὑποκείμενον 基体)であり、ウーシア(οὐσία)であるとされ、ロゴスは素材に形と性質を与えて個物を形成するものであるゆえに、トポイオン(τὸ ποιοῦν)でポイオテース(ποιότης)と考えられた(訳注)

それで彼らは、理性的な力は性質で、幸福はそれに全面的に依存しているからである

しかし、彼らにとっての出発点は、理性的な生なのである、なぜなら、幸福はそれに全面的に依存しているからである

したがって、幸福は別種の生に依存していることになるだろう、もっとも、わたしは「別種」ということばを並立するものとして論理的に区別されたものという意味で言っているのではなく、われわれが成るものはより先に、成るものはより後にあるなどと言っているような意味で言っているのであるが…

——すなわち、そのことばが植物に語られるばあいとは、それぞれ異なった意味内容をもっている——

してみると、この「生」ということばは、いろいろな意味で語られ、その生をもっているものがはじめにあるのか、二番めにあるのか、それにつづくものかによって、生もいろいろと異なっているのだし、また生をおこっていることも各々は同じでもいろいろな意味内容をもったことばとして語られ

それぞれの段階のものは明瞭さや漠然さにおいて異なった生をもっているのだから、それに対応して、よく生きるということも、いろいろと異なってくることは明らかである。それに、成るものが他のものの影響ならば、前者のよき生が後者のよき生の影響であることも明らかである

それで、きわめて充実した生をもっているものが——それは、生のいかなる点においても足らざるところのないものなのであるが——<トーエウ 生>をもつとすると、きわめて充実した生をおこっているものだけが幸福であり、そこにこなるだろう

つまり、諸々の存在のなかでもっとも善いものは本当の生をおこっているのであり、完全なる生なのであるから、きわめて充実した生をおこっているのは、そのもっとも善いものをもつことにもなるわけである

なぜなら、そのようなばあいには、きわめて充実した生をおこるもの(<よき>は外からもたらされたものでもなければ、他の領域からもたらされたものでもないのであって、それもまきものたちしめるのでもないからである

というのも、完全なる生を義務の生とするなら、もっとも、もし人が善の本性を、と言えるのであれば、そのムの部はわれわれになじみのふんいきのであるけれども、しかしまわれわれは探し求めているのは、原因ではなくて、含まれているもの(ἐ.エニュパルコン τὸ ἐνυπάρχον)なのである

ところで、完全な生つまり真実で本来の姿をとっている生がその知的なものなのなかにあるということや、それが以前のものとは不完全で生の影にすぎず、完全でもなければ純粋でもないし、非生とくらべたりしたりがいのあるものではないということは、これまでにしばしば言われてきたことである

しかし、いまここで簡略化して、「生きているものはすべて一つの源から生じるのだが、異なった生きものはそれぞれ異いい生きがをしているのではないは上、その源が第一位のものとも完全な生でなければならない」ということも言っておこう

5
かくして、もし人が完全な生をもつことが可能であれば、その完全な生をもっている人はまた幸福であることになる

だが、もしそうでないとしたら、つまり、そのような生は神々のなかにあるとしたら、人は神々のなかにあるような幸福を認めることになるだろう

してみるとわれわれは、この幸福は人びとのなかにもあると主張しているのだから、どうしてそうなのかを考察していかねばならない

なぜ、わたしの主張は、次のようなものであるか、すなわち、「すでにほかで述べられたことからしてもわかるかなとおり、人は感性的な生のみならず、思考の働きや真の知性をもっているのだから、完全な生をもっていることになる」というのがそれである

しかしはたして、人はそれとは別の存在であるから、それを自分とは異なったものとして もっているのだろうか

では、この種の完全な生は、彼自身の一部として彼の なかにあるのだろうか、それとも、彼自身が一種のような物語っているのである

いや、むしろ、われわれの説によれば、世間一般の人はその完全な生を潜勢的にもっているのだから、それを彼る種の部分としてもっていることになるが、幸福な生をおこっている人は実に現勢的にその完全な生なのであり、その完全な生と同じものへと移行してしまっているのだから、すでにその完全な生なのである

いや、そうではない、潜勢的にであれ、とりかくそれをもってもいないのであれば、そのムは要するに人間でさえもないのであって、実にそれを現勢的にもっている人こそ、われわれが また幸福であると言っている人なのである

このばあい、彼の まわりにほかのもの(肉体のこと)が付着していても、それは彼の裏にそって付着しているのではないから、彼の一部とみなすことはできないだろう、とかく、彼の意志によって結びつけられていたのなら、彼のものだったのかもしれないが、そうではないのである

してみると、その人にとって、善とはいったい何なのだろうか

彼のもつ完全な生ゆえに、彼自身が彼自身にとって善なのである

そして完全な生の状態にある人は誰かに何を求めたりしないということが、彼自身が善である ことを物語っているのである

というのも、彼は誰かに対して何ごとをもとめるのだろうか、彼は自身にとっても善なのであるのだから、

——もっともこのばあい、かなたにある善が彼のなかにある善の原因なのであって、この知性や真実在のかなたにあるものが善であるということからして、ただちにその善が彼にそなわっているということにはならないのであるが——

それゆえ、このような生をもっている人の生活は自足的であり、そしてその人は、幸福と善きものの所有という点で自足的であり、また、幸福と善きものをもっているのであって、自足的な賢者にふさわしいものなのである

つまり、彼はそれを彼に付着している肉体のためにおめるのであるが、たとえ肉体が生きているとしても、それはあまりでも肉体に固有な生を生きているのではない

彼は肉体の生に必要なものを知っており、彼が肉体に与えようとしているものをも与えても、彼自身の生からは何も失うものはないのである

右のような次第であるから、彼は数々の不運な出来事にさまされようとしても、その幸福を損なうことは少しもないだろう

たとえそのような逆境におかれても、完全な生がどうあっているからである

5
しかし、苦しみやさらに病そのほか一般に活動を妨げるものについて、はどうだろうか、それにまた、賢者が自己意識さえもっていない時にはどうだろうか。

たとえその身内の者たちや友人が死んでも、彼は死の問たるかをよく知っているし、死を受ける者たちが賢者なら、やはりその者たちも、死の何たるかを知っているのである

またたとえ身内の者たちや親者たちが死んで彼を悲しませるとしても、悲しむのは彼自身ではなく、彼のなかの知性をもっている部分で、彼自身がその部分の受けた悲しみを受けることはないであろう

では、いったいどうして、賢者は苦しんだり病気になったりするのだろうか(アリストテレス「ニコマコス倫理学」X6)

トロイアの王プリアモスはヘクトルやパリスなど五十人の息子と五十人の嫁をもっていたと言われるが、やがて次々と子供を失い、悲惨な運命を辿ることになる(訳注)

しかしながら、彼の求めるものはあくまでも必要やなそえざるもの(τὰ ἀναγκαῖα)なのであって、それも彼自身のためにではなく、彼に付属している或るもののためにおめるのである

要するに、もし幸福なんの欲しないことがあって、それが彼の身にふりかかってきても、そのことによってただちに何がしから幸福が奪われるということはないのである

彼の意の及ばないことは無関心であり、ただとえそれらが彼の意に反することをもたらしても、彼にそなわっているテロス(幸福)をいさかぐらつかせることはないである

だが、人間にかかわることで、この世のすべて超えた上の世界へと昇り、もはや下の世界にあるものなどには頓ることもない賢者から、軽くあしらわれることのないようなたえざる出来事とは、どんなことなのだろうか

賢者は幸運の順物の方は、たとえば王位、国家や国民の支配、統民、国家の建設などのようにどんなに重要なことでも、まことれらを彼自身の方でなしえたはずあいでも、大きなことは考えないに、権力からの追放とか祖国の崩壊などということになると、だに大きな出来事でもあるのかように考えはばならない理由があるのだろうか(エピクテトス「語録」I28,14)

だから、もしほんとうに賢者がそんなことを大きな悪だと思ったら、あるいは重要な出来事だとみなしたら、ほんとうは それは賢者ではないのであって、

われわれは、賢者は死について、肉体を伴った人びとの死のみならずいろいろ大きなものをたばねならないと言っているのである。

だが、もし賢者自身がいにえとして捧げられたとしたら?

しかし、彼が埋葬されなければ?

だが、もし彼が高い墓の記念碑に値しないとみなされ、高い費用をかけないで、無名の墓に埋葬されることになるとしたら

では、戦場で捕虜として連れていかれるとしたら

だが、もし彼の身内の者たち、たとえば「息子や娘たちが」捕虜となって「引っぱっていかれる(ホメロス「イリアス」XXIII65)」とした

彼は祭壇の傍らで死ぬことになるのだから、自分の死を悪と考えるのだろうか

彼の肉体は地上に置かれようが地下に置かれようが、どこかへ、そんなことにかかわりなく腐ってしまうだろう

そんなことは些細なことだ

もし幸福に生きることができなければ、「あなたの傍らには」そこから逃れる「道が開かれている(自殺すること、ホメロス「イリアス」IX43)」のだ

それでは——と、われわれは言うだろう——もし身内のひとびとを何も見ないで死んでしまうなら、どうだろうか

すると彼は、身内の者たちがそのように思って人間的なことであるだろうが、

いや、たとえそのように思っても、幸福なのであろ、だからまた、そのようなことが実際に起こるとしても、

なぜなら、彼は、この宇宙万有の自然といろのはこのような不運をもたらすものであり、われわれはそれにたどりわなければならないように なっているのものだということに、留意するだろうから

はたして彼はこの世をあこがれたって、そんなことは起こりえないと思うだろうか、もしそうなら、彼は愚か者だろう

してみると、とはたしてそのような不運が未来に起こるかもしれないと思えば、それでもなお彼は幸福ではなくなるのだろうか

というのも、まことに賢者なら、たとえ<他人>が身内の者たちを、これこれのように思って、

だが、苦しみの方がうわまわるなら、彼は、

それゆえ、彼は、身内の者たちが死んでもなおいまだ生きているとは思うだろうから、

それとも、彼は、

それゆえ、彼は、

それゆえ、彼は、

それゆえ